新潟県小中学校教頭会
会報
No.193

目　次

●副会長挨拶 …… 1
●関ブロ大会提言者の声 …… 2
●特集 …… 3～4
●郡市教頭会ネットワーク …… 5
●教育懇談会報告 …… 6
●教務室マネジメント …… 7
●随想 …… 8

今、児童生徒たちに向けて、私たちができること

新潟県小中学校教頭会
副会長　小　島　　淳
（上越市立飯小学校）

令和２年度は、東京オリンピックを筆頭に全国規模で多くの事業が中止や延期となりました。新潟県教頭会も、ウイルス感染による学校運営に支障が生じないようブロック別研究大会等の事業の中止措置をとらせていただきました。既に準備を進めてくださっていた皆様には大変ご迷惑をお掛けしました。

感染症は学校の教育活動にも大きく影を落としました。この状況で、私たちが児童生徒たちに向けてできることは何でしょう。私は次の３点を考えました。

一つ目は、児童生徒に目標をもたせることです。４月、学校行事の中止や縮小を決定しなければなりませんでした。各種大会の中止を告げられた児童生徒（特に最高学年）が落胆する姿を見ることは、教員にとって大変辛いことでした。「子どもたちの活躍の場を確保したい」これは全ての教員の思いです。各校では、児童生徒の成長と思い出の１ページを守るために、校長先生を先頭に感染予防対策と影響を最低限度にとどめる工夫を凝らしていらっしゃることと思います。とある中学校の吹奏楽部の演奏会で「大会はなくなってしまったけれど、今日皆さんの前で演奏できて本当にうれしいです」という代表生徒の挨拶を聞きました。その時、児童生徒には目標が必要であり、それを保障するのが私たちの務めであると強く感じました。

二つ目はトライ＆エラーを繰り返すことです。感染症による臨時休業は、児童生徒の学びを止めないためにどうすればよいかという課題を私たちに突き付けました。同時に、学校のICT環境整備の遅れを浮き彫りにしました。現在GIGAスクール構想の取組（通信ネットワークの整備と一人一端末配備等）が急ピッチで進められています。その情報端末の導入に不安感を抱いている教師がどの学校にもいると思いますが、教師の得手不得手によって使用頻度に差が出てはなりません。まずは私たち教頭が先陣を切ってトライ＆エラーを繰り返し、授業への導入のヒントを示すことが大切ではないでしょうか。

三つ目は自己を振り返り磨いていくことです。８月に文部科学大臣から差別・偏見の防止に向けてメッセージが出されたとき、私は強い危機感を覚えました。それ程罹患者や医療従事者に対する差別や偏見がひどい状態なのかと。確かに私の心の片隅にも「ウイルスを持ち込んでくれるな」という気持ちはあります。しかし、そのような自己や身内を守りたいという気持ちは、他者を差別や排除する理由にはなり得ません。私たちは自らの人権意識を高め、児童生徒の人権を守るとともに、児童生徒が相手の人権を尊重できる心を育てていかなければなりません。第72回全国人権・同和教育研究大会兼第28回新潟県同和教育研究集会は、来年の11月13、14日に延期されました。貴重な研修の機会が延期され大変残念ですが、この間、自己を振り返り、「かかわる同和教育」の実践を積み重ね当日を迎えたいと考えます。

今なおこの状況が好転する兆しは見えてきません。しかし、いつか出口にたどり着きます。それまでの間、私たちは互いに情報を共有し、児童生徒のためにできることを一つ一つ進めていきましょう。

関ブロ大会提言者の声

地域の児童生徒の郷土愛を育む教頭会の役割

五泉市・東蒲原郡小中学校教頭会
長谷川　　覚
（阿賀町立上川小学校）

１　主題設定の趣旨

阿賀町の児童生徒総数は480人である（令和２年度）。また、阿賀町は少子高齢化の進む町であり、小中学校の規模も小さい。このような地域で育つ児童生徒に対して、地域の魅力を知り、その魅力を発信する力（＝「地域と関わる力」）を育成したいという阿賀町に勤務する教職員の願いが、この研究を始めるきっかけとなった。そこで、児童生徒の郷土愛を育む教頭会の役割について研究を進めた。

２　研究のねらい

町の豊かな自然や歴史、産業などの教育的資源を活用した活動を意図的に仕組むことが大切である。それは、人的・物的資源を活用した地域の特色ある活動を通して、郷土の未来に対する当事者意識をもたせることにつながると考えた。

３　研究の概要

(1)　阿賀学の創設

教頭会で各校の地域学習の内容をいくつかに分類・体系化し、それらを「阿賀学」とした。

【阿賀学のイメージ】

(2)　「阿賀学」が生み出した教育効果

①　各校の地域学習を簡単に特徴化して見ることが可能となった。例えば、「Ａ小学校は、歴史学に力を入れているんだな」や「Ｂ小学校とＣ中学校は観光についての交流学習ができるのではないか」など。

②　学校の統廃合により教育課程を再編成する上でも、共通の教育活動として考えることができた。

③　「阿賀学」を阿賀町教育委員会が作成したリーフレット「阿賀町の教育（2019～2021）」に組み入れていただいた。このことで、町ぐるみで児童生徒を育てようという意識が高まり、地域学習としての「阿賀学」の定着が見られた。

(3)　学校と地域との連携・強化

教頭会では各校と地域の連携・強化の在り方を町ぐるみで探り、推進しようと考えた。この取組が、地域コーディネーターが自身の役割を研修する場や、地域学習の成果を紹介する場となることを期待し、以下のことを協議・推進した。

町の社会教育課、下越教育事務所と協働して連携を促進する場【地域連携研修会】を設定する。

教頭会と社会教育課の連携に加え、町ぐるみで子どもを育てる意識を強くもたせるため、学校教育課との新たな連携と協力の必要性を感じた。また、各校や地域毎の活動の振返りを行い、改善を重ねながら実効性ある取組となるよう次年度につなげた。

４　本研究の成果と今後の課題

(1)　成果

本研究を推進するための屋台骨とも言える「阿賀学」を創設できたことは大きな成果と言える。今後この阿賀学を推進し定着させていくことが、地域連携の持続性・発展性につながると考える。

(2)　課題

学校と地域を「つなぐ」ことは、教頭の重要な役割の一つである。コミュニケーション力や企画力、実行力をもって、組織と組織、人と組織を結び付けなければならない。

また、町ぐるみで子どもを育てる意識を教職員はもちろん、行政関係者にも高めてもらうことも大切である。「つなぐ」ための工夫を追求していくこと、これこそが教頭会に今、求められている大きな役割である。

特集　我が校の業務改善

我が校の業務改善

長岡市三島郡小･中･総合支援学校教頭会
寺　井　昌　人
（長岡市立阪之上小学校）

当校における業務改善は、ボトムアップとトップダウンの二つの方向で進めている。

ボトムアップの業務改善は、教職員のひらめきや気付きを大切にすることである。教務室教頭机の前に「業務改善手帳」を用意し、教職員のひらめきや気付きをすぐに書き残せるようにしている。定期的に管理職が手帳を点検し、内容を吟味し業務改善を実施するという形をとっている。思いついた時にパッと書け、管理職に伝えられるというメリットがある。これまで「学年便りの部数削減」「個人棚の設置」など、小さくても多くの改善を行うことができた。

トップダウン業務改善は、管理職が提案し計画的に改善を図っていくものである。「仕事はA4一枚でまとめなさい」という図書を参考にし「ねらい」「現状」「課題」「方法」「日程」の五つの視点で内容をまとめ、職員や保護者に提案する。業務改善手帳の中の内容で大きな事案であったり、学校の仕組み自体を変えたりする必要があったりするものはこれで提案する。目的や方法がはっきりするので、慣習にとらわれることなく同意や理解が得られやすく改善がスムーズに進む。大きな改善であると、「通知表の所見を年１回にする」「日直の業務の見直し」「登下校時刻の見直し」などを行うことができた。

今後もボトムとトップの二つの方向から業務を改善を図っていきたい。ただし、内部での改善も飽和状態になってきているので、アウトソーシング（ＳＳＳの活用）、業務の統合化なども視点に入れていきたいと思う。

業務改善のチャンス

上越市教頭会
水　谷　桂　介
（上越市立雄志中学校）

ひとつのウイルスが、世界をこんなに変えてしまうとは…。こんな思いで日々過ごしています。そんな中、学校では、来年度の年間行事計画を慎重に考える時期になっています。

働き方改革の視点をもって、今年度も試行錯誤しながら教育活動に取り組んできました。当校では、担任、副担任の枠を外し、加配をいただきながら、複数担任制を全学級で行っています。担任間で事務的、生徒指導的な役割分担をしたり協力したり、また、計画的な年次有給休暇にも対応できるようになったりと、工夫次第で業務改善が可能となっています。また、平日の夜七時半以降や土日祝日は、管理職が電話対応を行っています。このように、手探りではありますが、仕事の能率化や先を見越した計画的な取組に向けて取り組んでいます。

今年度は、業務改善を進める上で、様々な気付きがあり、組織で改善しようとしてきました。例えば、行事ひとつを考えても、「あれ？この行事なくてもいいのでは？」や「やはり、これはいい行事だな」といった感想は皆さんも少なからずあったことと思います。本当に必要なものと、そうでないものが見えてきたようです。やはり生徒の目の輝きや夢中になる度合いが違います。今年度は、上級生と下級生の交流がかなり制限されてしまいました。行事を通して、生徒たちは、リーダーシップの在り方やフォロワーシップの在り方の大切さを学んでいたことがよく分かりました。果たして、この３年生は自己有用感を得る機会が十分にあったか心配になります。生徒はどう思っているのかを把握しつつ、今後の実施の意義を考えるべきではないでしょうか。

「今までやってきたから本年度も実施する」ではなく、効果をはっきり実感できた取組をより大事にし、絶対に譲れない部分を見極めることを意識しています。当校でも、形骸化している取組や行事は何かを「大胆に」精選する時期が来ています。アフターコロナの時代になった時、より精選された新しい教育が始まると思います。これは同時に、業務改善のチャンスと言えるでしょう。

特集　我が校の業務改善

通知表所見の在り方を見直す

阿賀野市小・中学校教頭会
彌源治　仁　伺
（阿賀野市立安田小学校）

当校では、月60時間以上の超過勤務者が採用１校目の職員を中心に多い傾向にある。月45時間以上の超過勤務者となると、その数はベテランも含めて更に多くなる。

会議や行事の精選、家庭訪問から位置確認への変更、通知表・指導要録の電子化など、これまでも業務改善を行ってきたが、超過勤務者が依然として多い現状を踏まえ、新たな業務改善が必要と考えた。

そこで、今年度の業務改善の対象として取り上げたのが、これまで「書くのは当たり前」と考えていた“通知表の所見”である。

まず、①通知表は電子化されてはいるが、若手・ベテランを問わず通知表所見の記載に係る実質的な負担は大きいことから少しでも軽減できないか、②通知表の所見の在り方を変更するに当たり、事前に教職員の理解を得ること、保護者への丁寧な説明が必要、ということに注意して業務改善を検討した。

当校は３学期制のため、学期末毎に通知表の所見を記入していた。そこで、１学期終業式後の５日間に個別面談を実施し、１学期末の所見を記入しないこととした（２・３学期の所見はこれまでどおり記載する）。ただ単に「所見無し」とするのではなく、代わりに保護者との面談で児童の頑張りや伸びを直接伝えるようにした。

実際に上記の方法で実施したところ、保護者からの批判や混乱の声は無かった。学級担任の丁寧な面談があったからとも言えるが、業務改善の一つの形を示すことはできた。

「所見を毎学期書くことは当たり前」ではなく、発想を転換し、当たり前を見直していく。今後の業務改善には、やはりこのような視点が欠かせないと感じた。まだまだ課題は多いが、超過勤務を減らし、教職員が子どもたちと触れ合う時間を確保できるよう引き続き業務改善に取り組んでいく。

子どもたちのためにできること

新発田市･北蒲原郡小中学校教頭会
冨　樫　　晃
（新発田市立住吉小学校）

「学校は子どもたちのためにある。子どもたちのためにできることをしていこう」校長の合言葉の下、コロナ禍において、子どもたちと職員の安全を第一に置き、日常生活における感染防止策を万全とするとともに、各種行事の内容を吟味しながら、教育活動を展開している。

職員は、日々多忙な業務をこなしているが、業務改善として当校が実施している取組の一部を紹介する。

１　職員会議の効率化

主任クラスが参加する企画委員会で、行事等の案を協議し、大筋を決定する。その後、主任が協議した内容を、各学年の職員に伝達する。

全体の職員会議では、企画委員会で協議した内容をもとに全体協議し、最終決定をする。

内容が企画委員会で事前に協議され、大筋決定しているので、職員会議を短時間で終了できている。

２　学年担任協力制の推進

高学年中心に、学年内で社会や図工、家庭科、書写等の授業を担任間で入れ替える。一つの授業を複数回行うため、教材研究の時間の削減になっている。

また、もう一つの効果として、学年内児童の様子を把握し、指導や情報交換に役立てることができ、学年の児童は、学年担任全員で育てる意識の高揚につながっている。

（例）Ａ組担任：Ｂ組家庭科、Ｃ組図工を担当
　　Ｂ組担任：Ｃ組書写を担当
　　Ｃ組担任：Ａ組社会を担当

教頭として常に心掛けていることは、職員にとって、職員室が何でも話せる雰囲気にあることや、課題を見つめ、何をその時中心に据えて考えるかということである。大所帯の学校であるが、これからも職員のチームワーク、そして「子どもたちのためにできること」を大切にして取り組んでいきたい。

郡市教頭会ネットワーク

「つながり」と「学び」の充実を目指して

南魚沼郡市教頭会
会長　笹　岡　　正
（南魚沼市立六日町小学校）

南魚沼郡市教頭会は、南魚沼市及び湯沢町の小学校18校、中学校５校、特別支援学校１校の24校で構成されています。

例年は、主な活動として総会を２回、研修会を４回（うち２回は総会と併催）開催しています。今年度は新型コロナウイルス感染防止のため１学期の活動は中止とし、２学期にようやく研修会を行うことができました。

研修会では、中学校区ごとの課題に向けた話合いや全国大会や関ブロ大会等への参加報告、地域に出向いての巡検等を行っています。

中学校区ごとの話合いでは、中学校区の課題解決に向けて、小学校同士そして小学校と中学校がより緊密に連携していけるよう、情報共有や情報交換、解決策の検討を重ねています。学校間の連携を深めていくためには、やはり教頭のネットワークが不可欠です。今年度は開催できていませんが、研修後の交流会も大切なつながりの場となっています。

地域に出向いての巡検では、旧町を単位としてローテーションで会場を設定しています。近年では、小中一貫校や統合中学校の視察、グローバルハイスクールの見学など、地域の教育環境の動向についても学んでいます。その中で教頭の役割や在り方について考える機会となっています。また、郡市外からの転入も多いことから、地域の施設や名所を巡る研修も地域を知るための貴重な機会となっています。

他にも、県大会や関ブロ大会の発表に向けた全員参加の検討会や特別支援学校の教頭を講師としたミニ特別支援研修会等も行っています。様々な研修を通して互いに刺激し合う中で、教頭としての力量アップにつなげています。

コロナ禍で制約の多い状況ですが、研修の充実や会員相互の連携強化を目指して、今後も教頭会の活動を進めていきたいと思います。

校務支援ソフトの活用

胎内市小中学校教頭会
会長　山　沢　正　仁
（胎内市立中条小学校）

胎内市小中学校教頭会は、小学校５校、中学校４校の計９校、９人で組織されています。今までは、「県内２番目に小さい規模の」と紹介していましたが、今年度からは「県内で最も小さい規模の教頭会」となりました。何事も一番になるのはちょっと誇らしいものです。

胎内市小中学校教頭会は、毎月１回の定例会を設けています。教育長の指導を受けたり、共同実施との連絡会や合同研修を実施したりしています。また、情報交換を大切にし、日々の課題や悩みを共有し、解決できるようにしています。

定例会以外でも、校務支援ソフトを通じての教頭同士や教育委員会との強いつながりを感じます。胎内市では「おまかせ校務」という校務支援ソフトを活用しています。新潟市、長岡市、南魚沼市、見附市、十日町市等で導入されているようです。クラウド型のパッケージ製品で、市内全小中学校と教育委員会がネットワークでつながっています。グループウェア機能を有し、掲示板やメール機能を使って、個人連絡や全体連絡ができます。各校と教育委員会以外には開かれていないので、個人情報の管理も安心です。

今年度、この「おまかせ校務」を使って、教頭間や教育委員会との間で行った情報交換は下のようなものがありました。今年の特徴や胎内市の特徴が出ているように思えます。

- ○　新型コロナウイルス感染症対策
- ○　運動会の保護者案内（コロナ対応）
- ○　クマ出没やクマ鈴の保護者向け文書
- ○　保護者向けメールの設定方法
- ○　タブレット導入情報

胎内市小中学校教頭会は、規模の小ささを強みにし、外部との連携やネットワークを使ってつながりを強固なものにして邁進する組織です。子どもたちや教職員のために力を尽くす教頭会です。

教育懇談会報告

令和２年度　教育懇談会の報告

新潟県小中学校教頭会
副会長　寺　井　昌　人
（長岡市立阪之上小学校）

日時：令和２年１月19日（火）15：00～16：55
会場：じょいあす新潟会館
主催：新潟県小学校長会・新潟県中学校長会

１　教育委員会ごあいさつ

新潟市教育委員会教育長　前田 秀子　様

○今年度は、小学校は新学習指導要領の全面実施、中学校は全面実施に向けての準備、ＧＩＧＡスクール構想の加速、加えてコロナ対策に追われる大変な年であった。

○生活が大きく変化し、リモートによる情報共有の便利さが実感できた。制約がある中で、学校現場の慣習の見直し、教育活動の目的の見直しが進んだ。

○コロナ禍の中、様々な行事を新しい形で行ったことで子どもたちは大きく成長した。コロナ禍で育った子どもたちの将来の姿が楽しみである。

２　研究協議

協議題「コロナ禍における学校経営」

話題提供①新潟市立亀田小学校　校長　津野治彦

「支持的風土を高める取組」

～コロナ禍でも学校ならではの学びを大切に～

コロナ禍でも、ガイドラインに沿って次の２つの場で支持的風土の醸成を図った。

○子どもが進んで関わることができるような場
- クラスタイムの時間を設定し、子どもたちにゲームや集団遊びなどの運営の場を一任した。
- 亀っ子タイムの時間を設定し、縦割り班で活動する場を６年生に一任した。

○子どもが自分の思いを伝え、伝え合いが可能になる場
- 全校体制での伝え合う取組
  「かめっせーじ」「亀っ子Tube」「メッセージボード」
- 各学級での伝え合う取組
  「ほめ日記」「ミニ賞状」「すてきだね付箋」…
- 運動会や修学旅行などでも伝え合う場の設定

話題提供②新潟市立関屋中学校　校長　山田　聡

「コロナ禍における学校経営」

危機管理の際のマネージメント手法「ＯＯＤＡ（ウーダ）ループ」を活用した。今年度は、この手法に従い修学旅行を中止とした。以下の４つの視点の中で特に観察が大切であり、多角的多面的に情報収集をすること必要である。緊急時での対応に有効である。

○「ＯＢＳＥＲＶＥ」：観察
- 学校行事等を実施するための情報を集め状況を観察する。

○「ＯＲＩＥＮＴ」：情勢判断
- 学校経営会議での検討を経て職員会議で最終判断をする。

○「ＤＥＣＩＤＥ」：意思決定
- 意思決定の理由を明らかにする。

○「ＡＣＴ」：行動
- 保護者、生徒、職員などに決定内容を周知する。

３　指導講評

新潟県教育庁　義務教育課　参事　今井　渉　様

○要望書については、県の財政危機もあり満額回答はない。しかし、たくさん示唆を与えていただいた。県としては、義務標準法の改正に関わる業務も進めていく。

○研究協議では、貴重な提案をいただいた。県教育委員会も文部科学省と同様に、コロナ禍でも学校教育ならではの取組を大切にしている。また、危機管理の枠組みを学ばせていただいた。

○（義務教育課長　佐藤理仁様からのメッセージ）コロナ禍で、多くの子どもたちや保護者が不安を持っている。そんな時こそ、校長先生の笑顔で気持ちを和らげてほしい。

新潟市教育委員会　学校人事課長　吉田　亨　様

○新潟市では、支持的風土を「認め合い、助け合い、期待をかけ合い、高め合う温かい学級の風土」と定義し、「傾聴・受容」「支援」「自立」を大切にしている。亀田小の実践はまさにその事例である。各学校では、コロナ禍での新しい教育活動のアイディアを出し合い取り組んでもらっており感謝している。

○計画的に教育活動を進められるＰＤＣＡサイクルと緊急時の対応ができるＯＯＤＡループの併用が大切である。危機的状況では、情報収集と観察が重要である。それによって適切な判断ができることを紹介していただいた。

私の職員室マネジメント

十日町市立十日町小学校
髙　橋　雅　彦

「パワハラ」「セクハラ」といった言葉にはどきりとしますが、普段から冗談でそれを言い合える職員室はむしろ職員の人間関係が良好で、逆にそうした発言が無言の圧力によってはばかられるようなら何かしら問題があると思います。冗談は職場の雰囲気を和やかにし、笑顔と活気を生み出します。外国ではジョークのうまい人は知的な人という認識があります。ハラスメントのない健全な雰囲気の職場を築くことを普段から意識しています。

また、毎年恒例の児童会行事に、全職員が着ぐるみを着て参加するように働き掛けています。自分で用意できない職員には私の私物を貸しています。着ぐるみを着た職員に子どもたちは毎年大喜びです。こうした提案に快く賛同を得るためにも、日頃の職員のチームワークを大切にしています。ちなみに校長先生はハリーポッターに扮してくださいました。

黒板一枚分の配慮

燕市立島上小学校
鈴　木　孝　幸

新型コロナ禍で緊張感を強いられるなか、教職員は不安を感じながら働いている。市教育委員会からの指示への対応、保護者・地域等への情報発信、外部団体との連絡調整…刻々と変化する状況のなかで教職員に安心感を与えるためには迅速かつ確実な情報共有が欠かせない。そのため、職員室に移動黒板を持ち込み、学級担任への指示・依頼を書き込んだ。児童への指導、家庭連絡、外部との連絡調整など各所から発信される指示・依頼を一つの黒板に書き込むことで情報を一元化でき、学級担任はいつまでに何をやればいいのかが一目で分かるようになった。また、教育委員会の通知や各分掌からの文書を一緒に掲示することで、各自の必要に応じて指示の詳細や趣旨を確認できるようにもした。黒板一枚分の配慮でも、教職員に安心感をもって働いてもらうためにできることがある。

職員室のマネジメントについて心がけていること

村上市立荒川中学校
近　　貴　志

教頭勤務６年が過ぎようとしている。「日々の学校運営に齟齬がないように」、「いっそうよい学校にする」ということに腐心してきた。一方で、「良い職員室環境をつくる」ことができているかどうか。折にふれて振り返る必要があると反省している。

教総第495号に「(管理職は) 業務管理にあたっては、単に厳しくするだけでなく、コミュニケーションの円滑化を図っていくことや組織内の相互理解を進めるという点にも配慮すること」とある。私はこのことを肝に銘じている。単に職員を注意するのではなく、その前に可能な限り情報を収集すると、そのような事態を招いた原因や背景が見えてくる。教頭は、俯瞰的に状況を見て考察すれば的確な助言や解決ができる立場にある。情報収集・率先垂範・不平不満や悩み事の聞き取りを心掛け、明るい職員室の環境づくりに努めている。

私のルーティーン

佐渡市立新穂小学校
宮　川　秀一郎

自分が一番大切にしていることは、会話である。当たり前すぎるかもしれないが、コミュニケーションを図る最大の武器である。私の朝はまず、庁務員さんとの会話から始まる。校内の隅々を知る庁務員さんから様々なことを教えてもらえる大切な時間である。次に出勤してきた先生方一人一人に声を掛ける。朝の挨拶＋oneで職員の体調や子どもたちの情報、時に悩み事までこの時間に知ることもある。そして、次に登校してきた子どもたち一人一人にも声を掛ける。子どもたちの表情や声から今日の体調や気分をうかがい知ることができる。気になる事は、すぐに担任に知らせる。日々、この朝のルーティーンを手始めに、休み時間等にも多忙な先生方や子どもたちの隙間を見付けては声を掛ける。短い会話であることと継続が極意である。自惚れかも知れないが、結構上手くいっているのではと考えている。

随　想

雪とコロナ禍と私

柏崎市立北条小学校
坂　口　信　二

雪が降る。降り積もる。自分が子どもの頃の昭和40年代前半は、今よりもたくさんの雪が降ってきた記憶がある。当時は上越市吉川区の中でも雪がよく降るところだったこともあるが、玄関前が２m近くあって、除雪も間に合わず、家に入るにも一苦労だった。「雪かき」も「雪かき」ではなく、「雪ほり」。実際に一階の窓が埋まってしまうので、外の明かりを入れるために雪を掘り下げて、窓を出すということもしていた。

そんな中で雪遊びを楽しんでいた。近くに同年代の子が多く、スキーをしたり、雪合戦をしたりして、毎日大雪でも楽しかった。春が近づけば「しみわたり」もでき、どこまでも雪の上を歩いて行ける嬉しさがあった。

本来なら身動きの取れない苦しい冬の生活であるが、それなりに工夫をして暮らしていた。春になればまた楽に暮らしていけるという思いもあったかもしれない。今年は大雪のようだが、いつか春は来る。温かさが戻ってくれば、今年の雪の苦しみはとけてしまうだろう。

しかし、今はコロナ禍の時代である。苦しい生活を強いられている。一番つらいのは先が見えないことかもしれない。その中で、子どもたちに何か楽しさや希望を与えることが、私たちが今一番しなければならないことであると考えている。楽しみは人それぞれに違いがある。ならば、私たちが子どもの頃の楽しみ方を教えてあげるのもよいだろう。読書、集団での遊び、…。更に子どもたちに希望をもたせるために、諸活動を「中止」ではなく、工夫をして「継続」する方法を模索していきたい。

わくわくする毎日を

見附市立新潟小学校
佐々木　善　男

「楽しい人には草も花　いじけた人には花も草」

高校生の時に校長先生から聞いた言葉である。言葉どおり、プラス思考の人はどんなつまらないこともすばらしいものに感じ、マイナス思考の人は、どんなすばらしいものに出会ってもつまらなく感じてしまうものだということを説いた言葉だ。当時、自分が生活の中で感じていたことを、短い言葉で言い表したものであり、それ以来、自分の信条となっている。

教員となってからは、学生時代とは比較にならないほど大変なことが多くなったが、ここまで続けてこられたのは、大変さをやりがいに感じ、毎日起こる様々なことを楽しみ、周囲に感謝できているからだと思う。

教頭となってもその考え方は変わっていないが、わずかに変化したことがある。それは、自分が感じている「わくわく」を教職員にも伝えたい、広げたいということである。考え方の押し売りをしようとは思わないが、少しでもよい影響があればうれしく思う。どの教職員にも、プラス思考で職務に当たってほしいと願う。作戦を練ったり、試行錯誤を繰り返したりする先にある子どもたちのちょっとした成長。子どもに変化をもたらす可能性があることに、我々は日々取り組んでいる。こんなにもわくわくすることは、他にあまりない。

何気ない日常生活の中に楽しみを見付け、多少の苦しいことはプラスに捉えてやりがいに変えることで、仕事も遊びも、そして人生そのものも楽しくなる。明日も何が待っているのか、わくわくする毎日である。

新潟県小中学校教頭会
［　事　務　局　］
県教頭会ホームページ
全国公立教頭会ホームページ
〒950-0911　新潟市中央区笹口２丁目７−17 和田ビル２F
E-mail　n-kyotoh@crest.ocn.ne.jp　TEL（025）244−8225
https://www.niigata-kyotokai.jp/　FAX（025）244−5060
http://www.kyotokai.jp/